

# 保存活動の旗振り役

館山の愛沢伸雄さん(66)

## 本1冊分ぐらいの寄稿

地域の文化財を守り、活用する取り組みに30年以上情熱を傾ける。赤山地下壕(こう)をはじめとした戦跡、国史跡にもなった稲村城跡、最近では青木繁が「海の幸」を描いた小谷家住宅など幾多の文化財の保存活動の旗振り役を務め、本紙への登場回数も数え切れない。

「本1冊分ぐらいは書かせていただいたでしょうか。活動を知らなくてもらうには新聞の存在は大きかった。掲載によって、人がつながり、活動の輪も広がった。言葉では言い表せないぐらいお世話になりましたよ」

地域の文化財を守り、活用する取り組みに30年以上情熱を傾ける。赤山地下壕(こう)をはじめとした戦跡、国史跡にもなった稲村城跡、最近では青木繁が「海の幸」を描いた小谷家住宅など幾多の文化財の保存活動の旗振り役を務め、本紙への登場回数も数え切れない。

「本1冊分ぐらいは書かせていただいたでしょうか。活動を知らなくてもらうには新聞の存在は大きかった。掲載によって、人がつながり、活動の輪も広がった。言葉では言い表せないぐらいお世話になりましたよ」



自宅で房日に目を通す愛沢伸雄さん＝館山

してくれますね。地域紙ならではのいいところ。自分の顔が出るということは関係者にとってはうれしいことなんです。活動するうえでみんなの励みになる」と語る。

「本1冊分ぐらいは書かせていただいたでしょうか。活動を知らなくてもらうには新聞の存在は大きかった。掲載によって、人がつながり、活動の輪も広がった。言葉では言い表せないぐらいお世話になりましたよ」

日々の紙面では「毎日のまちの動きを見ることが出来る。中でも同じように環境保全など市民運動、地域活動をやっている

房日新聞  
**70周年**  
記念特集

**読者登場**

に活用している。「私にとっては古新聞ではなく、資料。ただ家の中は新聞でいっぱいです」と苦笑い。

「今後の房日新聞について「時代、地域の流れが大きく変わっていく中で、将来を見据えたまちづくりの方向性をどう見ていくか。70年の歴史の厚みがある中で、地域新聞の役割が問われているのでは。今後市民目線で市民のコミュニティーづくり、まちづくりにつながる紙面展開を願う」と求めた。